『言語情報学研究報告』No.4（2004）

インドネシア語

降幡　正志
（東京外国語大学講師）

1. インドネシア語の使用地域と人口

インドネシア語は，インドネシア共和国の国語・公用語である。また，東ティモール民主共和国では実用語（working languages）の 1 つとされている。

インドネシアには数百を数える地方語が存在し，一般にそれぞれの地方語が母語となり，インドネシア語は主に学校教育において習得する第二言語であることが多い。1990 年時点におけるインドネシア語母語話者数，第二言語話者数，および話者の多い 8 地方語の母語話者数とそれぞれの総人口に対する割合を以下に挙げる（Maryanto(2001)に基づき作成。）

総人口（1990 年国勢調査）：1 億 5826 万 2640 人			
インドネシア語話者		地方語母語話者	
母語話者	2380 万人（約 15%）	ジャワ語	6026 万人（約 38.1%）
第二言語話者	1 億 706 万人（約 68%）	スンダ語	2415 万人（約 15.2%）
（合計）	1 億 3087 万人（約 83%）	マドゥラ語	679 万人（約 4.3%）
		ミナンカバウ語	353 万人（約 2.2%）
		ブギス語	323 万人（約 2.0%）
		バタック語	312 万人（約 1.9%）
		バンジャル語	275 万人（約 1.7%）
		バリ語	259 万人（約 1.6%）

2000 年の国勢調査ではインドネシアの総人口は約 2 億 626 万人であった。仮に上表の割合で計算すると，母語話者数が約 3108 万人，第二言語話者数が約 1 億 3985 万人，これらを合わせたインドネシア語の話者人口は約 1 億 7100 万人となる。しかし実際の話者人口はこれを上回ると思われる。

一方，人口約 79 万人の東ティモールでは，インドネシア語の話者人口について明らかなことは言えないが，40%を超えるという調査結果がある。

参考文献

Maryanto (2001) : “Tes UKBI dan Pengajaran BIPA”. Paper for 4th International Conference on the Teaching of Indonesian to Speakers of Other Languages (KIPBIPA IV), Sanur, Bali,

October 2001.
Masinambow, E.K.M. & Haenen, Paul. (ed.) (2002) : *Bahasa Indonesia dan Bahasa Daerah.* Jakarta: Yayasan Obor Indonesia.

2. インドネシア語の規範・方言概略

2.1. ムラユ語からインドネシア語へ

インドネシア語は，マラッカ海峡周辺（マレー半島，スマトラ島）で古くから用いられていたムラユ語から派生した言語である。柴田(2001)はインドネシア語を「ムラユ語の標準変種」と述べている。

交易のための商用語として用いられたムラユ語は早い時代からマラッカ海峡周辺のみならず海を通じて現在のインドネシア地域に広まった。マラッカ海峡からかなり離れた島々に，ムラユ語がその地域の言語として定着した例も少なくない。

20 世紀に入り高まる民族主義運動の中，1928 年に宣言・採択された『青年の誓い』において，すでに広く分布していたムラユ語を「インドネシア語」と呼びこれを統一言語とした。独立後，インドネシア語が国語としてインドネシア共和国憲法で定められ，インドネシア全土において公用語・共通語としての役割を果たすこととなる。

2.2. 標準インドネシア語

Masinambow & Haenen(2002)は，標準的なインドネシア語はスマトラ島リアウ地方のムラユ語に基づいていたとし，またスマトラ島出身の作家たちによる数々の文学作品もインドネシア語の普及に大きな役割を果たしたと述べている。一方 Lapoliwa(2002) は，『青年の誓い』の中で述べられた「インドネシア語」は当時の知識人が用いていた“教養あるムラユ語”のことを指し，それが標準となったと論じている。

独立後，国語・公用語として「標準」インドネシア語が，ヨーロッパ語の文法に当てはめるなどの形で整備されていく。言語政策推進の担い手は国家教育省所管の「言語建設開発センター」であり（柴田(2001)），その一大事業として，現在のインドネシア語の規範とすべく『標準インドネシア語文法』（Alwi et.al.(1998)）および『インドネシア語大辞典』（Departemen Pendidikan Nasional(2001)が編纂されている（いずれも初版は 1988 年）。

書き言葉としてのインドネシア語はスマトラ島のムラユ語をベースとしつつ人為的に手を加えて規範化がなされたという側面を持つが，最多の母語話者数を持つジャワ語の影響がとりわけ語彙面で目立つ。また，話し言葉は，地域により程度の差はあるが，ジャワ語や首都ジャカルタで話されるムラユ語ジャカルタ方言の影響がかなり大きいといえる。

インドネシア語の規範的発音に関しては，Lapoliwa(2002) が「“教養あるムラユ語”が発音についても標準となった」と述べているが，具体的にどの地域のものが基になったかという言及が見あたらない。

参考文献

Alwi, Hasan, et.al.(1998) : *Tata Bahasa Baku Bahasa Indonesia*. Edisi ketiga. Jakarta: Balai Pustaka.

Departemen Pendidikan Nasional (2001) : *Kamus Besar Bahasa Indonesia*. Edisi ketiga. Jakarta: Balai Pustaka.

Lapoliwa, Hans (2002) : "Lafal Bahasa Indonesia Baku". *Forum Bahasa & Sastra.* (http://www.bahasa-sastra.web.id/hans.asp).

Masinambow, E.K.M. & Haenen, Paul. (ed.) (2002) : *Bahasa Indonesia dan Bahasa Daerah*. Jakarta: Yayasan Obor Indonesia.

柴田紀男(2001):「インドネシア語」, 亀井孝他(編),『言語学大辞典　第1巻　世界言語編上』(第6刷). 三省堂. pp.712-717.

2. 3. インドネシア語の方言

Masinambow & Haenen(2002)は, インドネシア国内でムラユ語(およびその方言・変種)と認められる日常言語(母語)として 12 の名前を挙げ, 1980 年国勢調査では回答者自身の日常言語としてこのうちの 4 つの名前が回答されていた, と述べている。このことは, これら 4 つについては回答者自身の言語が「インドネシア語」ではなく「ムラユ語」であるという認識が働いていることを示している。他の 8 つが話されている地域では, 回答者自身の日常言語はインドネシア語であると認識しているか, あるいは別の言語名で回答されていたという。ムラユ語の一方言と見なされる場合でも, それをムラユ語の方言と呼ぶべきかインドネシア語の方言と呼ぶべきか, 判断に迷うところである。

その一方で, 地方語を母語とする者は, 第二言語として習得したインドネシア語がそれぞれの地方語の影響を受け, その結果さまざまなバリエーションを持つことになる。こうしたバリエーションも, ある意味ではインドネシア語の方言と考えることができよう。

参考文献

Masinambow, E.K.M. & Haenen, Paul. (ed.) (2002) : *Bahasa Indonesia dan Bahasa Daerah*. Jakarta: Yayasan Obor Indonesia.

3. 文字と発音

3. 1. インドネシア語の文字 (abjad)

インドネシア語の表記はラテン文字を使用し, これらは abjad と呼ばれる。正書法では発音を区別する特殊記号はいっさい用いない。以下の表は, インドネシア語で用いられる文字(大文字・小文字各 26 字)およびそれぞれの発音を示している。

大文字	小文字	発音	大文字	小文字	発音
A	a	**[a]**	N	n	**[en]**
B	b	**[be]**	O	o	**[o]**
C	c	**[tʃe]**	P	p	**[pe]**
D	d	**[de]**	Q	q	**[ki]**
E	e	**[e]**	R	r	**[er]**
F	f	**[ef]**	S	s	**[se]**
G	g	**[ge]**	T	t	**[te]**
H	h	**[ha]**	U	u	**[u]**
I	i	**[i]**	V	v	**[fe]**
J	j	**[dʒe]**	W	w	**[we]**
K	k	**[ka]**	X	x	**[eks]**
L	l	**[el]**	Y	y	**[je]**
M	m	**[em]**	Z	z	**[zet]**

3. 2. 綴り字と発音の関係

文字は，以下の点を除いて基本的にいわゆるローマ字読みである。

1） 2 つの音を表す字:

E(e) は，**[e]** と **[ə]** の 2 音を表す。正書法ではこの 2 音を区別せず表記する。学習書や辞書では，これらを区別するために，**[e]** に対してアクセント記号を用いて É(é) と表記することがある。

2） 1 音を表す 2 字の組み合わせ:

以下の 4 つは，2 字で1音を表す(2 字をそれぞれ別個に発音しない)。

ng **[ŋ]**　　ny **[ɲ]**　　kh **[x]**　　sy **[ʃ]**

3） 1 つの音に対する別個の 2 字:

f と v はいずれも **[f]** の音を表す。**[f]** は外来語にのみ現れる音である。インドネシア語には **[v]** がなく，v を含む語を外来語として取り入れる際に，綴り字は基本的にそのまま v を用いる(ただし語末では f となる)が発音は **[f]** となる。

3. 3. 外来語にのみ現れる音と綴り字

以下の綴り字は，外来語にのみ現れる音を表す。

f **[f]**　　v **[f]**　　z **[z]**　　kh **[x]**　　sy **[ʃ]**

q や x を含む語を外来語として取り入れる場合，ごくわずかな例を除いてそれぞれ k および ks と表記する。

参考文献

Alwi, Hasan, et.al (1998) : *Tata Bahasa Baku Bahasa Indonesia*. Edisi ketiga. Jakarta: Balai Pustaka.

Departemen Pendidikan Nasional (2001) : *Kamus Besar Bahasa Indonesia*. Edisi ketiga. Jakarta: Balai Pustaka.

4. インドネシア語の音節

インドネシア語の音節は母音を核(音節主音)とし，その前後に子音を伴うことができる。Alwi ら(1998)は，インドネシア語に現れる音節構造の型が 11 あるとし，音節構造とその語例を以下のように掲げている(Vは母音を，Cは子音を示す:原文では子音はKで表されているが，ここでは便宜上Cを用いた)。

1.	V	*a*-mal, su-*a*-tu, tu-*a*
2.	VC	*ar*-ti, ber-*il*-mu, ka-*il*
3.	CV	*pa*-sar, sar-*ja*-na, war-*ga*
4.	CVC	*pak*-sa, ke-*per*-lu-an, pe-*san*
5.	CVCC	*teks*-til, kon-*teks*-tu-al, mo-*dern*
6.	CVCCC	*korps*
7.	CCV	*slo*-gan, *dra*-ma, ko-*pra*
8.	CCVC	*trak*-tor, a-*trak*-si, kon-*trak*
9.	CCCV	*stra*-te-gi, *stra*-ta
10.	CCCVC	*struk*-tur, in-*struk*-si, *strom*
11.	CCVCC	kom-*pleks*

インドネシア語は基本的に外来語を除いて 1 音節内に子音連続を持たない。上表の 5～11 は外来語にのみ現れる音節構造である。

このような子音連続を含む語はしばしば子音間に [ə] を挿入して発音される。また特に語末において，母音の後の子音連続で2つ目，すなわち音節末(語末)の子音が破裂音の場合，その子音が脱落し母音の後が 1 子音のみとなって取り入れられることが多い。

参考文献

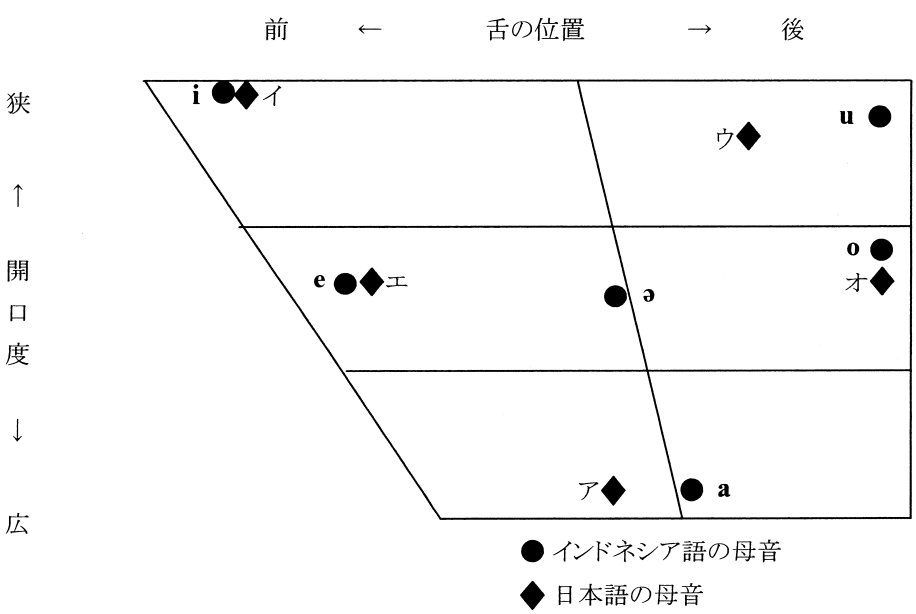
Alwi, Hasan, et.al. (1998) : *Tata Bahasa Baku Bahasa Indonesia*. Edisi ketiga. Jakarta: Balai Pustaka.

5. インドネシア語の母音と子音

5.1. インドネシア語の母音

インドネシア語の母音は，以下の6音素が単母音として立てられる。母音の長短による意味の区別はない。正書法では **/ e /** と **/ ə /** を区別せず **e** と表記する。また **/ u /** は円唇母音であるが，日本語の「ウ」がしばしば非円唇で発音されるため，日本人学習者が **/ u /** と発音したつもりでも非円唇の **/ ə /** と取られやすい。

音素	音声	用例
《非円唇母音》		
/ i /	**[i]**	**[kita]** *kita*‘我々’
/ e /	**[e]**	**[ketel]** *ketel*‘やかん’
/ ə /	**[ə]**	**[kətan]** *ketan*‘もち米’
/ a /	**[a]**	**[kata]** *kata*‘単語’
《円唇母音》		
/ u /	**[u]**	**[kuta]** *Kuta*‘クタ(地名)’
/ o /	**[o]**	**[kota]** *kota*‘町’



5.1.1. 二重母音

インドネシア語には ai, au, oi の 3 つの二重母音があるとされる。このうち oi を含む語はわずかで，出現する頻度は少ない。

ai, au の発音はそれぞれ **[aj]**, **[aw]** が標準的とされるが，会話では **[ej]**, **[ow]** となることが多い。いずれも開音節にしか現れない。つまり，その音節がこれらの母音で終わり，後に子音が続かない環境でしか二重母音となることがない。語末（音節末）が子音でその前に ai または au があっても，それらは別の音節を成す母音の連続でしかない。また，語が ai や au で終わっていても，二重母音ではなくそれぞれ別の音節を成す母音連続となる語も存在する。

【二重母音の例】 ＊ **[.]**は音節の切れ目を表す補助記号。

[pa.kaj] / [pa.kej]　　*pakai*‘使う’

[ka.law] / [ka.low]　　*kalau*‘～なら’

【母音連続の例】

[ditanda.i]　　*ditandai*‘表す’ ～ 語末の i は接尾辞:
直前の a との間に形態素境界あり

[ma.u]　　*mau*‘するつもり，ほしい’ ～ *mahu* の *h* が脱落

一方，二重母音であるとは認識されていないが，二重母音のごとく発音される母音の連続も存在する。

例） **[in.do.ne.sia̯]**　*Indonesia*‘インドネシア’

5.1.2.　/ ə / と他の 5 母音との相違点

インドネシア語の6母音音素のうち，/ ə / は他の5母音には見られない制約がいくつか見られる。その主なものは以下のとおりである。

（1） 外来語や擬態語・擬声語など限られた語彙を除いて，最終音節に / ə / は現れない。

（2） 1 形態素内で / ə / は他の母音と隣り合うことがない。

（3） 第 2 最終音節の母音が / ə / の場合，語アクセントの位置が最終音節に来ることが他の 5 母音と比較して非常に多い（語アクセントについては後述）。

5.2.　インドネシア語の子音

22 の子音音素があり，うち 4 つは外来語にのみ現れる。一般に無声破裂音（**p, t, k**）は帯気を伴わないこともあり，慣れないうちは有声破裂音（**b, d, g**）との聞き分けが困難な場合もある。語末の子音，とりわけ無声破裂音，有声破裂音，鼻音（**m, n, ŋ**），声門摩擦音（**h**），流音（**r, l**）は日本人学習者にとって習得が比較的難しいようである。

5.2.　インドネシア語の子音

22 の子音音素があり，うち4つは外来語にのみ現れる。一般に無声破裂音（**p, t, k**）は帯気を伴わない。声門摩擦音（**h**）は語末でも発音される。

音素	音声	用例	
《破裂音》			
/ p /	**[p]**	**[pagi]**	*pagi*‘朝’
/ b /	**[b]**	**[bagi]**	*bagi*‘～にとって’
/ t /	**[t]**	**[tata]**	*tata*‘配置，仕組み’
/ d /	**[d]**	**[dada]**	*dada*‘胸’
/ k /	**[k]**	**[karaŋ]**	*karang*‘岩礁’
/ g /	**[g]**	**[garaŋ]**	*garang*‘激しい’
《鼻音》			
/ m /	**[m]**	**[mata]**	*mata*‘目’
/ n /	**[n]**	**[natal]**	*natal*‘クリスマス’
/ ny /	**[ɲ]**	**[ɲata]**	*nyata*‘明らかな’
/ ng /	**[ŋ]**	**[ŋəri]**	*ngeri*‘ぞっとする’
《摩擦音》			
/ s /	**[s]**	**[sama]**	*sama*‘同じ’
/ h /	**[h]**	**[hama]**	*hama*‘害虫’
/ f / *	**[f]**	**[fakta]**	*fakta*‘事実’
/ sy / *	**[ʃ]**	**[ʃaratˀ]**	*syarat*‘条件’
/ z / *	**[z]**	**[zakatˀ]**	*zakat*‘喜捨’
/ kh / *	**[x]**	**[xawatir]**	*khawatir*‘心配する’
《破擦音》			
/ c /	**[tʃ]**	**[tʃari]**	*cari*‘探す’
/ j /	**[dʒ]**	**[dʒari]**	*jari*‘指’
《ふるえ音》			
/ r /	**[r]**	**[rupa]**	*rupa*‘かたち’
《側面接近音》			
/ l /	**[l]**	**[lupa]**	*lupa*‘忘れる’
《接近音》			
/ w /	**[w]**	**[warna]**	*warna*‘色’
/ y /	**[j]**	**[jakin]**	*yakin*‘確信する’

（注 1）「音素」の項は，音声と綴り字との対応を示すため正書法の綴り字を用いて表記した。

（注 2）*印を付した摩擦音の 4 音素は外来語にのみ現れる。

	両唇	唇歯	歯 歯茎 後部歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	喉頭	声門
破裂音	**p b**		**t d**			**k g**			
鼻音	**m**		**n**		**ɲ**	**ŋ**			
ふるえ音			**r**						
はじき音									
摩擦音		**f**	**s z ʃ**			**x**			**h**
側面摩擦音									
接近音					**j**				
側面接近音			**l**						

	後部歯茎
破擦音	**tʃ dʒ**

	有声唇軟口蓋
接近音	**w**

○ 語末の無声破裂音は，一般に調音点での閉鎖により呼気の流れを止めるのみの発音で，閉鎖後の破裂を伴わない。但し，母語である地方語の影響など話者の言語環境によって，開放（破裂）を伴う発音となる場合もある。

[saja] *saya*‘私’ **[ada]** *ada*‘ある，いる’ **[batu]** *batu*‘石’
[sajapˀ] *sayap*‘翼’ **[adatˀ]** *adat*‘慣習’ **[batukˀ]** *batuk*‘咳’

○ 語末（音節末）の / **k** / は，しばしば声門閉鎖音（ **[ʔ]** ）で実現される。音配列や話者の言語環境などによりある程度の出現の傾向が見られるが，/ **k** / は語末（音節末）において **[kˀ]**（**[ˀ]**は無開放を表す補助記号）と **[ʔ]** の自由変異音を持つといえる。

[tampakˀ]，**[tampaʔ]** *tampak*‘見える’

○ 接頭辞 ***bər-*** や ***pər-*** が母音で始まる基語に付された派生語は，語によって接頭辞と基語の間で区切れるような（形態素境界と音節境界が一致する）発音をするものもあれば，接頭辞の末尾の ***r*** が後続母音を主音とする音節の一部となるような（形態素境界と音節境界が一致しない）発音をするものもある。なお，以下の右側の 2 例は接尾辞 *-an* も伴っている。

◆形態素境界と音節境界が一致する語例：

[isi] *isi*‘中身’ **[industri]** *industri*‘産業’
[bər.isi] *berisi*‘中身がある’ **[pər.industrian]** *perindustrian*
‘産業（に関する事柄）’

◆形態素境界と音節境界が一致しない語例:

[ikutˀ]	*ikut*‘ついて行く’	**[iŋatˀ]**	*ingat*‘覚えている，思い出す’
[bə.rikutˀ]	*berikut*‘次の’	**[pə.riŋatan]**	*peringatan*‘警告，記念（行事）’

○ 接頭辞 ***məŋ-*** や ***pəŋ-*** が母音で始まる基語に付された派生語は，外来語など若干の例外を除いて，接頭辞の末尾の ***ŋ*** が後続母音を主音とする音節の一部となるような（形態素境界と音節境界が一致しない）発音となる。

[adʒar]	*ajar*‘（教え）’
[mə.ŋadʒar]	*mengajar*‘教える’
[pə.ŋadʒar]	*pengajar*‘教師’

○ 接尾辞 ***-an*** や ***-i*** が子音で終わる基語に付される際には，基語の末尾の子音が後続する接尾辞の母音を主音とする音節の一部となるような（形態素境界と音節境界が一致しない）発音となる。なお，以下の右側の例は接頭辞 ***məm-*** も伴っている。

[hukum]	*hukum*‘法’	**[pəŋaruh]**	*pengaruh*‘影響’
[huku.man]	*hukuman*‘罰，刑’	**[məmpəŋaru.hi]**	*mempengaruhi*‘影響を与える’

参考文献

Alwi, Hasan, et.al (1998) : *Tata Bahasa Baku Bahasa Indonesia.* Edisi ketiga. Jakarta: Balai Pustaka.

Zanten, Ellen van (1989) : *Vokal-Vokal Bahasa Indonesia: Penelitian Akustik dan Perseptual.* Jakarta: Balai Pustaka.

6. インドネシア語のプロソディー　：　アクセントとイントネーション

6.1. アクセント

6.1.1. アクセントを表す音声的要素

Halim (1974,1984)は，インドネシア語におけるアクセントの決定要因として音の高さと長さが大きく関与し，強さはアクセントを決定づける要因としては重要ではないと論じている。一方，Alwi ら(1998)は，アクセントを決定づけるのは音の強さだけでなく，音の長さや高さも要因となる，と述べている。

6.1.2. アクセントの位置と機能

インドネシア語では，語のレベルにおけるアクセント（語アクセント）は意味の弁別に関与しない。そのため同じ語であってもアクセントの位置が違って聞こえることがよくある。

Alwi ら(1998)は，インドネシア語におけるアクセントの位置は規則的であり，通常は第 2 最終音節にアクセントがくるが，その音節の母音が / ə / の場合は最終音節にアクセントが置かれる，と説明する。また，文中ではすべての語にではなく重要と思われる語にアクセントが置かれるとも述べている。

Halim(1974,1984)は，1 語もしくはそれ以上の語で構成されポーズ（空白）を区切りとするまとまりを「ポーズグループ」と呼び，1 ポーズグループに対して 1 つのアクセントがあると述べている。

文中の最終ポーズグループまたは文中の唯一のポーズグループは文構造上（より正確には情報構造上）では「評言」(comment)の役割を担い，第2最終音節にアクセントが置かれる。一方，中間的なポーズによって決定づけられるポーズグループ（文中でさらにその後にポーズグループが続く場合）は「主題」(topic)の役割を担い，最終音節にアクセントが置かれる。

Doní sedang tídur. 「ドニは寝ているところだ」
$2\text{-}33_r$ / 2- 3 1_r #

上の文例は *Doni* “ドニ（人名）”と *sedang tidur* “寝ているところだ”の 2 ポーズグループからなる。ここでは *Doni* が「主題」となり最終音節の *ni* にアクセントがおかれ，*sedang tidur* が「評言」となり第 2 最終音節の *ti* にアクセントがおかれる。

文例の下の数字はイントネーション型を表しているが，アクセントの位置は「主題」「評言」を示すイントネーション型に重なるようにして決定される。

なお，「主題」と「評言」の位置が入れ替わった文，つまり「評言」を先に述べ「主題」が後に続く文型（いわゆる倒置）も頻繁に用いられるが，この場合の主題は「焦点化されない主題」となり，アクセントが現れない。

6.2. イントネーション

6.2.1. 文構造とイントネーション

イントネーションは平叙文・疑問文・命令文などの文型と関連させて論じられることが多かったが，Halim(1974,1984)はインドネシア語のイントネーション型がこれらの文型と1 対 1 対応するものではなく，「主題」(topic)，「評言」(comment)を示すという文構造上におけるイントネーションの機能を論じている。『標準インドネシア語文法』(Alwi, et.al.(1998)) におけるイントネーションの記述は，Halim のイントネーション論を基本にしている。

Halim はイントネーションに関わるピッチレベルを低(1)・中(2)・高(3)の 3 段階に設定し，主題または評言となる「ポーズグループ」（アクセントの項参照）のイントネーション型を次のように分類した。

主題:　焦点化された主題（「評言」に先行）　**233**$_r$
　　焦点化されない主題（「評言」に後続）　**211**$_f$
評言:　「無標」の評言（文末または文中唯一のポーズグループ）　**231**$_f$
　　「有標」の評言（「焦点化されない主題」に先行）　**232**$_f$
※ *r* は rising（上昇），*f* は falling（下降）を意味する。

以下に，「主題」－「評言」の語順および「評言」－「主題」の語順の文例を挙げる。イントネーション型の表記に見られる / は文中におけるポーズを，# は文末（終末ポーズ）を表している。

「主題」－「評言」: Kopi iní masih pánas.　「このコーヒーはまだ熱い」
2-　33$_r$ / 2-　3 1$_f$ #
- *kopi ini* “このコーヒー”（焦点化された主題）
- *masih panas* “まだ熱い”（無標の評言）

「評言」－「主題」: Masih pánas kopi ini.　「まだ熱い，このコーヒーは」
2-　3 2$_f$ / 2 11$_f$ #
- *masih panas* “まだ熱い”（有標の評言）
- *kopi ini* “このコーヒー”（焦点化されない主題）

6.2.2. 文の枠組みとイントネーション

「主題」－「評言」の枠組みと「主語」－「述語」の枠組みは常に一致するとは限らない。1文中において文法上の「主語」とその文で述べようとする事柄のテーマ（主題）にずれが生じることは珍しくないが，インドネシア語では，イントネーション型によって「主語」－「述語」の枠組みとは異なる「主題」－「評言」を表現することが可能である。以下の文例では文法上，*dia* “彼(女)”が「主語」，*berangkat ke Amerika* “アメリカに出発する(した)”が「述語」であるが，ポーズグループのまとまりとイントネーション型により，伝達内容に違いが現れている。

Diá berangkat ke Amerika kemarin.　「彼(女)は，昨日アメリカに出発した」
233$_r$ / 2-　3 2$_f$ / 211$_f$ #
- *dia* “彼(女)”（焦点化された主題）
- *berangkat ke Amerika* “アメリカに出発する(した)”（無標の評言）
- *kemarin* “昨日”（焦点化されない主題）

Dia berangkát ke Amerika kemarin. 「彼(女)が出発したのは昨日，アメリカへだ」
2- 33_r / 2- 32_f / 211_f #

- *dia berangkat* “彼(女)が出発する(した)” (焦点化された主題)
- *ke Amerika* “アメリカへ” (無標の評言)
- *kemarin* “昨日” (焦点化されない主題)

6.2.3. 文型とイントネーション

平叙文・疑問文・命令文などの文型とイントネーション型は 1 対 1 対応するものではないと Halim(1974,1984)は論じている。「疑問文は文末が上昇調になる」と説明されることが多いが，Halim は疑問文のマーカーを伴わない *yes-no* 疑問文を除いていずれの文型も上述の 4 つのイントネーション型を示す，とする。

疑問文のマーカーを伴わない *yes-no* 疑問文は，イントネーションのみによってそれが疑問文であることを表すことになる。「評言」は第2最終音節において高(3)レベルに上昇する前にピッチの下降が見られ，アクセントは最終音節におかれる。また「焦点化されない主題」は最終音節においてピッチの下降に引き続き高(3)レベルへ上昇し，その後低(1)レベルに下降する型となり，また最終音節にアクセントがおかれる。

		一般的な型	*yes-no* 疑問文の型
主題:	焦点化された主題	**233_r**	**233_r**
	焦点化されない主題	**211_f**	**2_f31_f**
評言:	「無標」の評言	**231_f**	**2_f31_f**
	「有標」の評言	**232_f**	**2_f32_f**

Datangnyá jam tujuh pagí? 「来たのは朝7時？」
2- 33_r / 2- $_f31_f$ #

- *datangnya* “来たこと” (焦点化された主題)
- *jam tujuh pagi* “朝7時” (無標の評言)

Jam tujuh pagí datangnyá? 「朝7時，来たのは？」
2- $_f32_f$ / 2- $_f31_f$ #

- *jam tujuh pagi* “朝7時” (有標の評言)
- *datangnya* “来たこと” (焦点化されない主題)

参考文献

Alwi, Hasan, et.al. (1998) : *Tata Bahasa Baku Bahasa Indonesia*. Edisi ketiga. Jakarta: Balai Pustaka.

Halim, Amran (1974) : *Intonation in Relation to Syntax in Bahasa Indonesia*. Jakarta: Djambatan.
(1984) : *Intonasi dalam Hubungannya dengan Sintaksis Bahasa Indonesia*. Translated by Tony S. Rachmadie from Halim(1974). Jakarta: Djambatan.

7. インドネシア語音声の多様性

7.1. 単音（子音）

7.1.1. 外来語音の発音

外来語にのみ現れる 4 子音音素は，インドネシア語に固有の音素に置き換わることがしばしばであった。固有の音素に置き換わった語のうち，その発音が定着したものもあれば(語例 1 および 2)，外来語音が定着した(または定着していなくても正書法で外来語音を正規とする)ものもある(語例 3 および 4)。

(1)	**[f]** → **[p]**	**[pikir]**	*pikir*‘考える’
(2)	**[x]** → **[k]**	**[kabar]**	*kabar*‘知らせ’
(3)	**[z]** → **[dʒ]**	**[zaman]**	*zaman*‘時代’
(4)	**[ʃ]** → **[s]**	**[ʃahid]**	*syahid*‘殉教者’

現在では，外来語音が固有音に置き換わることなくそのまま取り入れられる場合がほとんどである。

7.1.2. 語末の破裂音

『標準インドネシア語文法』(Alwi, et.al.(1998))では，語末の破裂音について一律に，無声破裂音の場合は無開放（**[˺]**）となり(ただし **/ k /** は自由変異音として **[k˺]** の他に声門閉鎖音 **[ʔ]** が現れうる)，有声破裂音の場合は無声化しかつ無開放となると説明している。

しかし実際には，地方語の影響によって必ずしもこの通りにはならないこともある。ジャワ語母語話者は，語末の無声破裂音は上記の説明どおりだが，有声破裂音，特に **/ g /** については開放を伴う無声破裂音 **[k]** となる。一方スンダ語母語話者は，無声破裂音は開放を伴うことがしばしばであり，有声破裂音は有声のまま無開放の発音となる。

ジャワ語母語話者	スンダ語母語話者	
[tərik˺] , [təriʔ]	**[tərik]**	*terik*‘灼熱の日差し’
[gudək]	**[gudəg˺]**	*gudeg*‘グドゥッグ’(料理の1つ)

7.1.3. ジャワ語母語話者の / t / と / d /

一般にインドネシア語の / **t** / と / **d** / は歯音(または歯茎音)で発音されるが，ジャワ語では前寄りの歯音 **[t̪]**，**[d̪]** と後部歯茎音 **[t̠]**，**[d̠]** はいずれも独立した音素である。インドネシア語の / **t** /，/ **d** / はジャワ語では後部歯茎音 **[t̠]**，**[d̠]** と基本的に対応している。したがってジャワ語母語話者がインドネシア語を話すときに，ジャワ語の影響が強い場合には / **t** /，/ **d** / がかなり奥まった感じに聞こえる。

7.2. 単音（母音）

7.2.1. 5 母音音素の地方語

地方語の中には，インドネシア語にみられる6 母音音素のうち / **ə** / 以外の 5 母音しか持たない言語がある。このような言語の母語話者は，インドネシア語を話すときに / **ə** / を **[e]** で発音することがある。これは，/ **e** / と/ **ə** / を表記上区別せず **e** を用いることに起因すると考えられる。

インドネシア語	5 母音の地方語	
[kə mana]	**[ke mana]**	*Ke mana?* ‘どこへ？’

7.3. アクセントとイントネーション

7.3.1. アクセントの位置の地域差

インドネシア語は語のレベルではアクセントが意味の区別をせず文中の位置によってアクセントを受ける音節が変わりうるが，語を単独で発音した場合，アクセントを受ける位置にある程度の地域差が現れることがある。

例えばスマトラ島出身者は，ジャワ島出身者と比べると，最終音節にアクセントを置いて発音することが多くなる。

7.3.2. 地方語の影響によるイントネーションの違い

出身地あるいは母語である地方語によって，インドネシア語を話す際にイントネーションに違いが現れる，としばしば言われる。

スンダ語を例にとると，Coolsma(1985)はスンダ人の話し方について「歌うような，長くのばすような独特のイントネーションで，ヨーロッパ人にとってまねるのが容易でない」と述べている。スンダ語母語話者がインドネシア語を話す場合にもこうした特徴が現れ，話し方によってスンダ人であることがわかることもしばしばである。

参考文献

Alwi, Hasan, et.al. (1998) : *Tata Bahasa Baku Bahasa Indonesia*. Edisi ketiga. Jakarta: Balai Pustaka.

Coolsma, S. (1985) : *Tata Bahasa Sunda*. Translated by Husein Widjajakusumah & Yus Rusyana

from Coolsma (1904) : *Soendaneesche Spraakkunst* (published by A.W. Sijthoff). Jakarta: Djambatan.
石井和子 (1984) :『ジャワ語の基礎』. 大学書林.